

ディレクターズ  
魔王獣の収穫祭

# 収穫の姫姉妹

美夜緒ねこ

カバーイラスト : valyu

アーカム文庫

---

プリンセス・ハンティング

し ゆ う か く ひ め し ま い  
収穫の姫姉妹

み や お  
美夜緒ねこ

---



プリンセス・ハンティング  
しゅう かく ひめ まい  
**収穫の姫姉妹**

み や お  
美夜緒 ねこ

アーカム文庫

# もくじ

プロローグ 禁断への道	13
魔王の復活	38
囚われの姫	54
屈辱の舌責め	86
美女の快樂	100
処女狩り	108
黒い姫の誕生	124

• 密命の捜索隊

144

• 戦場の体験

164

• 黒い姫の目覚め

174

• 収穫の姉姫

186

• 地獄の処刑場

234

• 王国の崩壊

244

• エピローグ 結ばれた禁忌の絆

246

# プリンセス・ハンティング 収穫の姫姉妹

## 登場人物紹介



本能のままに行動する  
若き魔王

### 魔王ベイルーツ

本能のまま気ままに動く若き魔王。  
250 年に渡って封印されていたが、  
シャーディ姫の手により復活した。

# シャーディ・ フェデリア姫

フェデリア王国の第三王女であり、側室の母を持つ庶子でもある。

非常にがんばり屋で、ちょっぴりわがままな性格。いつもほめられたがっている。



誰にでも優しい世間知らずな姫

野心に溢れる  
おてんば姫

# イナルナ・ フェデリア姫

フェデリア王国の第一王女で、第一王位継承者。シャーディ姫とは腹違いの姉妹。世間知らずで誰にでも優しい性格。

# 魔王の参謀 カニス・キー

常に冷静沈着で、魔王を影から的確にサポートする。正面対決よりも策略を持つて行動するのを好む。

常に冷静沈着な  
魔王の側近

魔王のお世話ロボット



# 魔王の従者 イクラス・キー

高速魔導言語しか話せない為、常人には「ふが」  
という言葉にしか聞こえない。  
モンスターのレベルアップ等をする事ができる。

猪突猛進に戦場で暴れる  
切り込み隊長

## 魔王に仕える将軍 ウニス・キー

短絡的で後先は何も考えずに突っ込んでいく性格。  
情に厚く、姑息な手段が嫌い。

プリンセス・ハンティング

収穫の姫姉妹



## ■ プロローグ 禁断への道

樹高三・四十メートルはあるかと思えるほどの巨木が立ち並ぶ原生林の森は昼でも薄暗く、緑のふところの深さに吸收されてしまうのか、音や声は意外に思うほど遠くまで届かない。

どこかで猿かなにかが枝づたいに移動していく物音や鳥の甲高い鳴き声が聞こえる。それでも、蝙蝠やカエルなどの夜行性の生き物が多いので、夜の方があもう少しにぎやかだった。

時折現れる細道は、水場へ集まるこの森の獣たちによつて自然に生まれたもので人の手によるものではなかつた。

足下には朽ちかけた木や落ち葉が積もり、その上や陰に食用に適さない種類のキノコが生えている。

踏みしだかれた葉の下から、あわてて這い出してくる虫もいた。

行く手をさえぎるパイカの葉を押しのけながら、先頭の若者がムズリーケ山脈を抜ける細い道を進む。

その後に続くのが、数名の兵士達と王都からやつてきた考古学博士を真ん中にはさんだ学芸員の若者十数名。

そして、列のしんがりにつく護衛の兵達が彼らの身の安全に気を配っていた。ムズリーケ山脈の北側は、ここ二百五十年の間ずっと何人たりとも侵入することが禁じられていた禁止地区なのだ。

その為、そこへ行くための道は存在していない。

危険な猛獸がいる地帯ではないが、安全な場所ではない。

若い考古学部門の学芸員達と、今回同行している第三王女シャーデイ・フェデリア姫が遠足へ行く子供のようにはしやいでいるのが微笑ましい。

とはいっても少し緊張感を持つてほしいとは思うのも事実だった。

だが、側室の子であるために、王宮でかえりみられることも少なく、ある意味では虐げられて育ったシャーデイ王女が、唯一、父親である国王や王宮の者達から認められ、褒められるチャンスは国益となる古の魔道具の発見、それだけしか

ないのだ。

王宮内でシャーディ姫に優しく接するのは、腹違いの姉、イナルナ・フェデリ

ア姫くらいだった。

ベルファゴルト大陸一美しいと噂されるイナルナ・フェデリア姫は、フェデリ

ア国王の第一王女にして第一王位繼承者。

それゆえに、国王からも王宮の者たちからも敬愛される存在で、その生まれと育ちの良さから、ある意味で誰にでも公平に優しい姫なのだ。

側室だったシャーディ姫の生母は、シャーディの出産で命を落としていた。

平民の出である母親の実家からの後ろ盾もなく、側室の子であるシャーディ姫は第三王女でありながら、庶子として王宮の者たちから常に軽んじ、虐げられるなかで、健気にも一生懸命に生きてきた姫だった。

人は皆、自分の利害には敏感になる。

第三王女に仕える者達のなかで、本当にシャーディ姫の見方となる者は極わずかしかいない。

心から家族に愛されたいと望みながら、幸の薄いシャーディ姫の苦悩を、その

正反対に、溢れるほどの愛情をふんだんに注がれて大切に育てられた姉のイナルナ姫は決して理解することは出来ないだろう。

シャーディ姫が一生懸命に、古の魔導具を探査する姿には健気さを通り越して、痛々しいとまで思えてしまうほどだつた。

しかし国王や王宮の者達にとつては、側室の子であるのシャーディ姫の存在など、どうでもいいことらしい。

シグ・セリート博士は栓ないことと思いながらも、考古学者として新しい発見への期待とは別に、シャーディ姫に少なからず同情していた。

その時、少し足を早めて先行していた先頭の若者が、戻つてくると先頭集団の護衛兵達に何事かを怒鳴つた。

「ん？　なんて言つてるのかしら？」

額に浮かぶ汗をタオルでぬぐいながら、シャーディ姫が博士に尋ねる。

「んんー、少し遠すぎてよく聞きとれませんでしたが……」

調査団の一行は総勢三十名で、足場の悪い細道をウネウネと縦に進んでいたた

めに、先頭との距離がかなり離れてしまつていたのだ。

すぐに、先頭の護衛兵が駆け寄ってきて、顔を見合わせて二人に伝える。

「この先に、古い街道のようなものが在るみたいですね」

兵士が、少なからず興奮しているのがわかる。

「やつたあー、博士、手がかりよーっ！」

シャーディ姫が歎声をあげた。

「姫、とにかく見にいきましょう」

はやる気持ちを抑えこみ努めて冷静な声で答えると、セリート博士は姫と数名の学芸員を伴つて、案内する兵士の後にしたがつた。

生い茂る木の枝を搔き分けて進むうちに……突然、開けた人工の道に出た。

「道？　道だよね」

「道ですな」

「こんなところに道だなんて……」

最初に声を出したのはシャーディ姫だつた。

それに応えるようにセリート博士、博士の助手で学芸員リーダーのラクランが続いた。

3人はあり得ないモノに出会つた感覚と、この道が続くその先を目で追つた。

バタカウト街道から外れて四日……ムズリーケ山脈の原生林を進んで唐突に、平地に出た。

そして、その平地で『道』を発見した。

草はぼうぼうと生えて荒れ果ててはいたが、その道は小石程度の岩石が綺麗に敷き詰められて縁石まである。

どう見ても人工的に作られたとおぼしき道なのだ。

シャーディは今回の学術調査で初めての発見に、心躍らせずにはいられなかつた。

しばらく辺りの様子をうかがつて、考えを巡らしていた博士が提案する。

「この道を伝つて、ムズリーケの方へ戻つてみましよう」

博士が提案した、来た方向へ戻るというのは、この『道』を進んで禁止地区の

ムズリーグ山脈の北側へ出られるかもしぬない可能性だ。

それに気付いた助手のラクランとシャーディ姫も大きく頷いた。

「確かに、バタカウト街道からこの『道』に通じるルートがあるならば、周辺の村人か、旅の商人達が知らないわけがないはずですね」

「そうよね、それが知られていないと云うことは、この『道』は街道には通じていない。別の場所から来ていると考えるのが妥当よね」

「もしかすると、もしかするかもですね、博士、姫！」

「凄い、直ぐに行きましょうよ、博士！」

興奮したシャーディ姫が、駆け出して行こうとする。

慌てて、それをセリート博士が引き留める。

「待つて下さい姫、まずは、ここに野営の準備をしましよう！」

「ええーーっ、博士！ そんなのつまんない、つまんないーっ！」

子供のように頬を膨らませて焦れる姫に苦笑しつつも、遊びではない学術調査なのだから、ここは厳しく指示をだす。

「野営の設営が先ですよ。若い者に指示をだしたら、私達だけで先に下見をしに

「この『道』を少し進んでみましよう」

「きやあつ、やつたー、ね、ね、早く、早く」

子供のようにはしやぐ姫に苦笑しつつ、すぐに博士の指示で学芸員の半分が、  
今夜の野営の準備を始める。

数分後、残りの若い学芸員達と護衛兵を伴つて、シャーディ姫と博士達は来た  
方向を、この道に沿つて戻つてみるとした。

1時間も歩くと、新たな疑問が口を開けて待つていた。

道はムズリーケ山脈に入つて傾斜を感じられるところで消えていたのだ。

それは、まるで山を削つて作つた『道』に、無理やり土砂を掛けて消しさう  
とでもしたような感じだった。

しかも、土砂と言うには大量過ぎる、とんでもない量で埋めつくされている。

シャーディは山脈を見上げて、いぶかしげに呟いた。

「何かある。何かを隠したがつてゐる。そう思いませんか。博士？」  
「確かに……」

セリート博士の頭に一抹の不安がかすめた。

これだけの土砂、二百五十年前はここにあつた『道』。

それを隠すためだけに魔導で『道』を封じたのだとしたら……この大量の土砂は、あまりにも大き過ぎはしないだろうか……しかし、不安より好奇心の方が先にたつた。

辺りは、だいぶ薄暗くなつてきていた。

一行は、本日の処はひとまず引き返すこととした。

最初に『道』を発見した場所に戻るころには、すっかり日が落ち暗くなつてしまっていた。

そんななか、前方に野営の焚き火が見えてきて、誰もがほつとしてしまう。

既にテントが張られ、野営の準備は整つていた。

若い学芸員達が、夜食を用意して待つていてる。

三十人規模の調査隊のため、先に食事を済ませてテントに入つてゐる者もいたが、『道』の発見は疲れ切つた学術調査隊を大いに勇気づけるニュースになつた。

沸き返る若い学芸員達を後に遅く戻ったセリート博士は、招待されるままに、シャーディ姫の大テントで一緒に食事をとることにした。

火で炙られた鳥肉と、森で採取したと思える果実。

それに、王宮御用達の葡萄酒と、旅行用の固パンが用意されている。  
どうやら、森で兵士が姫のために野鳥を仕留めてきたようだ。

原野での学術調査で携帯保存食以外の物がいただけるのは、本当にありがたい。  
思わず博士の頬も緩んでしまう。

それに気付いたシャーディ姫が、につこり笑つて言う。

「護衛隊長が捕まえてくれたのよ、博士もどうぞ」

「これは、感謝します姫、では……」

しばらく炙りたての鳥肉に舌鼓を打っていた博士は、おもむろにシャーディ姫へ尋ねた。

「この地の探索、姫様、よく許可がとれましたね……」「んつ、そうよね……」

鳥肉を口に頬張りながら答える姫の顔は真剣だった。

「この間の議会で、全面的に解禁になつたの」

「しかし、フェデリア王国には、封印戦争後この二百五十年、踏み込んでは絶対にいけない禁止地区が多数あつたはずですが……」

「お父様の気が変わつたのよ」

「それだけなんですか」

あまりにも簡単過ぎるシャーディ姫の返答に、セリート博士は肩すかしを食らつたような釈然としないものを感じつつ、それ以上このことに言及するのは止めることにした。

姫には、言えない事情があるのだろう。

セリート博士は、食事の礼をのべると早々に自分のテントへ戻つて行つた。

博士が察するとおり、シャーディは本当の理由を知つていた。

フェデリア王国は今まで右大臣、左大臣を置いて、両者の異なる意見を持つてして國の方針を決めていた。

それが近年、老齢の左大臣エルフラツド候が病気がちになり、会議を欠席することが多くなるにつれ、右大臣ボーヴィル候が仕切ることが段々と多くなつていたのが原因だつた。

そして、ついこの間の議会で、禁止地区の全面解禁が法案で可決された。

今回の禁止地区の解禁も、禁止地区内にある金鉱脈を手に入れたい商人からの提案が発端だと聞いている。

シャーデイとしても、こんなに安易に禁止地区の全面解禁を決めて良いのだろうかと思う反面、この機会を逃すには惜しいと思つてしまつたのも事実だつただ。

結果として、それを利用する形でシャーデイはムズリーク山脈北方域への学術調査を申し出て、許可されるに至つている。

今度こそ、国益にかなう、お父様が気に入つて下さる魔道具を見つけるのだ。  
そうすれば、少しは私も役に立つことがわかつてもらえるはず。

そう思うと期待でなかなか寝付けず、シャーデイはテントの中で何度も寝返りを打つのだつた。

ざわざわと忙しく立ち働く人声に目覚めると、朝になつていた。

どうやら、少し寝坊をしてしまつたようだ。

急いで寝床から起き上がり、手早く身繕いをするとシャーディはテントの幕を押し上げ外へ出る。

丁度、そばを通りかかる助手のラクランに声をかけた。

「おはよう、ラクラン」

「おはようございます、姫様」

「もう、みんな早いのね」

「みんな、昨日発見した例の『道』に、興奮してますからね」

「そうよね」

見ている間に、どんどん野営地が片付いていく。

いつもの動きではない、みんな期待しているのだ。

「朝食の用意が出来てますよ、姫様もあちらで急いですませて下さい」

「あつ、うん。そうするわ」

ラクランの指さす方で、セリート博士と数人の学芸員達が朝食をとっているのが見える。

シャーデイも急いで、そちらに向かつた。

敷き詰められた岩石の間から雑草が凄まじく生い茂つてゐる処に、年月が感じられる。

だが、原生林の獸道とは違い、この道は明らかに人の手で作られたものだつた。  
「道に沿つて進みましよう」

セリート博士の声で、シャーデイ達は鎌で草を薙ぎ払いながらゾロゾロと、進行方向へ道を切り開いていく。

邪魔になる倒木をよけ、大量に生い茂る雑草をなぎ払う度に、無数の羽虫たちが舞い上がり行く手を阻む。

「こんなことなら、農学部の連中も連れてくればよかつたですねえ……。一気に殺虫剤まけたら楽なのに……」

助手のラクランがタオルで即席の防虫マスクを作り、目だけを出した情けない

姿で軽口をたたく。

それにつられる形で、他の学芸員達もぼやきともつかない冗談を言う。

「それなら、科学部でもよかつたんじやないですかあ……なんか、考古学ってより開墾してゐる感じで……俺達、考古学部ですよねえ、いつから土木部兼用になつちやつたわけ？」

「ほいほい、何でも出来りや就活、楽だぜえ」

「そうそう、私なんか、天然酵母パン作れるようになつちやつたわよん」

「あつ、それ旨そう……今度、喰わせてくれよ」

「なんと、今度は調理学部兼用かよ？」

楽しそうに会話をしているが、決して安易な道ではない。

誰もがこの向こうには、必ず新たなる発見がある。

その思いが、過酷な行程を全員がもくもくとこなす原動力になつていた。

だんだんと雑草の生い茂りかたが減少してきているのがわかる。

そして、それは遂に報われる形となつて表れた。

最初のころの原野状態はいつのまにか影を潜め、それほどの雑草を薙ぎ払わな

くとも、どうにか歩くことが可能なレベルまで道らしい道に近づいていたのだ。

そうして暫く進んで1時間くらい歩いたころだろうか、前方に建物らしき物影が見えてきた。

にわかにみんなの足が早くなる。

「城みたいね。博士、あの古城はなんという遺跡なの？」

「それは……すいません。わかりません」

無邪気に訪ねるシャーディ姫の質問に、答えられずセリート博士は口ごもる。禁止地区の情報など、博士の所属する研究院には公開されていないのだ。

途方に暮れる博士より、シャーディ姫の動きの方が早かつた。

あつという間に城の遺跡へ向かって、雑草や低木をピヨンピヨン避けながら、走っていく。

「あつ、お待ちください。シャーディ姫！ 誰か、姫を止めて！」

セリート博士の声に、慌てて護衛兵士がシャーディ姫の後を追う。

「姫様、姫、走らないで、待つて、お待ち下さい——！」

城門前でどうにか追いついた彼らは、シャーディ姫をやつとのことで引き留めた。

「姫様、お待ち下さい！」

「何でよ。バートも、セディも……ずっと前に廃墟になつた古城じやない」

一番乗りを引き留められたことにムツとしたシャーディ姫が、邪険に答える。だからこそ、何があるかわからないと護衛兵のバートは思うのだが、このおとんば姫が聞き入れる訳がない。

「我々が安全を確認します。姫様はそのあとで来て下さい」

「嫌よ！ 後から入るくらいなら、一緒に行くわよ！」

案の定、聞き入れてくれる気はないらしい。

こうなることは予想済みだつたのでバートは、やんわりと提案する。

「では姫様、私達の二歩後ろから確実に着いてきて下さい。別な方向に行きたいときは、直ぐに行動せず私達へ声を掛けて下さい。よろしいですね」「わかつたわ……」

不承不承ではあったが、どうにか納得してくれたらしい。

シャーディ姫の、おもりはなかなか大変なのだ。

二人の護衛兵とシャーディ姫は、城門をゆっくりぐると中庭らしき場所を抜けて、今は住む者もいない廃墟と化した古城へと入つていった。

床に積もつた厚い塵の層が、この城の年月を語つてゐる。

長い廊下に幾部屋もあるドアや廊下の調度は、どれも豪奢で荒らされていないことが不思議なくらい見事な物ばかりだつた。

この古城にある美術品だけでも、とてつもない価値のあるものだということが護衛兵のバートにもわかる。

自分達は、とんでもない発見をしたようだつた。

軽い興奮を押さえ込み、やつと中央の広間にたどりつく。

そこは大きなステンドグラスの窓が、幾つもはめこまれ外からの日差しが美しく彩りながら差しこむ、今迄に見たなかでも一番美しいと言つて差し支えのない玉座の間だつた。

あまりの美しさに、圧倒されて言葉がでない。

そのまま、しばらく広間に見とれていた三人の沈黙を最初に破つたのはシャーディ姫だった。

「三百五十年前のものとは思えないわね」

「ええ……そうですね」

「本当に……美しい……」

そう呟きながらバートとセディの2人は、やつと本来の役目を思い出す。

「姫様、私達が中を確認するまでは入り口でお待ち下さいね」

「はいはい、わかってるわよう」

少しだけ口を尖らせてシャーディ姫が返事をする。

二人は入り口でシャーディ姫に待つてもらう約束を取り付け、用心しながら広

間へ入りると安全を確認するために隅々を調べて歩いた。

そして、姫に頷いた。

「姫様、大丈夫です」

広間の入り口で待たされていたシャーディは、飛ぶように駆けこんでくる。

「さつ、宝探しよ！」

悪戯っぽく笑つてそう言うが、姫の目は真剣そのものだつた。  
堅い顔をしていたバートとセディも、笑顔で真剣に頷く。

「では、私は別な部屋を調べて参ります」

バートは、そう言うと広間を出ていった。

セディはたえずシャーディ姫の回りに目を配りながら、警護をゆるめることなく、この不思議な城のことを考える。

どうして、今まで誰もこの城のことを知らなかつたのだろう……。

これだけ大きな城で、調度から見て、かつての見事さはフェデリア王宮にも負けないほどの豪華さだつたはず……それほど立派な城なのに、昔語りにもなつていないので。

何かが、不自然な気がする。

「うおおおおお……っ！」

しかし、そんなセディの思いも、突然響いたバートの大きな叫び声に吹き飛ば

されてしまう。

咄嗟にシャーデイ姫がバートの声がした方へ向かおうとするのを、セディが押しつぶめる。

「お待ち下さい。姫様、バートが何か発見したのでしょうか」

「でもつ、何かあつたら……」

程なくシャーデイ姫とセディがもめている処へ、バートが駆け戻ってきた。

「姫様、姫様！ あちらに、とんでもない変わった部屋があります！」

かなり興奮ぎみにバートが報告する。

「本当っ？ 誰も来ないうちに見たいわ！」

「いいのですか、セリート博士を待たなくて？」

「いいの！ 私が、先に見たいのよ！」

新発見かもしれないのだ、勇むシャーデイ姫を止められるわけがない。

仕方なく、先ほどと同じ約束で妥協するとバートは案内をした。

回廊を幾つか曲がつてたどり着いたその部屋は、何とも言えない独特の臭いが

するのがセディは気になつた。

しかし、そんなことよりも驚かされたのは、その部屋の床には大きな穴が空いており地下へと続いていることだつた。

軽く人が5人くらいは一度に入れるような、大きな穴なのだ。  
その中は、緩い斜面になつて下へと傾斜している。

その真っ暗な穴の奥がどうなつてゐるかは、ただ見る限り全然わからない。  
シャーデイはセディが背中に背負つてゐる松明から1本を抜き取ると、火を付けておもむろに穴を覗き込んだ。

「気をつけ下さい。姫様、あああつ、ダメです！」

シャーデイは、バートとセディの制止を気にとめることなく床下へ降りてみると特に足場は悪くない。

「ちよつと、覗きに行つて来るわね」

「ひ、姫様、お待ち下さい！ 姫様——つ！」

そのまま、スタスタと穴の奥へ進んでみるとことにした。  
二人の護衛兵は、慌てて姫の後を追いかける。

壁に松明を近づけ注意深く見ると、地面が熱で溶かされた溶岩壁で壁が形作られていることがわかる。

「魔導具で作った穴かしら……ということは、この向こうへ行くとその姿が見られるつてことね」

シャーディは一人つぶやくと、足取りも軽く奥へ進んだ。

こんな大きな穴を掘る魔導具が在るとは、聞いたことがない。

きっと、この魔道具は国益にかなうはずだ。

これを手に入れれば、フェデリア国は他国に対して断然有利になるのは必至のはず。

そうしたら、お父様も王宮の者達だって、シャーディのことと認めてくれるに違いない。

お父様に褒めてもらえる。

そう考えると、シャーディは期待に胸を膨らませた。

どんどん穴の通路を進んで行くと、とても大きな空間にたどりついた。  
遠くで何か光るもののが見える。

シャーディは、その光りを目指して歩き始めた。

近づくと、光は天井に空いた小さな穴から、地上の光りがわずかに届いていることがわかつた。

2つの穴が、その周り周辺をやつと照らしている。

雨水がそこから入りこむせいなのだろう、辺り一面、苔でびっしりと覆われていた。

だが、シャーディは別の物に注意を奪っていた。

それは、光の柱から少し離れたところに、静かにただずんでいるかのようにさえ見える大きな黒い岩だった。

まるで畏怖するかのように、シャーディの知らない文字がびっしりと書かれた大きな魔方陣が描かれ、その真ん中に埋め込まれるように存在している。

地上からの僅かな光りで浮かび上がる、漆黒の闇をも呑み込むような見事に黒い貴石。

「キレイ……素敵だわ……」

不安と恐れの入り交じった思いで見上げながらも、シャーディはその巨大な石

を美しいと感じた。

## ■ 魔王の復活

「姫、姫様、大丈夫ですか」

恐怖さえも感じる漆黒の闇のような美しさに見とれていると、静寂を後方から来るもの達によつて破られる。

「あっ、あああ……」

パートやセディイだけでなく、セリート博士もラクラン助手も、調査隊の主だった者はみんな顔を揃えていた。

「これは多分、封印石……」

「これが封印石なのですか。うーん、実物を見れるとはすごい」

「封印石って？」

シャーディが、セリート博士に聞き返した。

「危険な物を封じ込めた石のことです。私も実際に見るのは初めてです。姫様、

不用意に近づいてはなりませぬぞ！」

「ええ、わかりましたから博士。でもね、これを見つけたのは私なのよ！」  
ちよつと、不満げにシャーディが言う。

「ここは一端、フェデリアに戻つて再調査したほうが良いでしよう。ラクラン、魔方陣の記録をとつて、みんなに撤収の指示を出すように」

「はい、博士」

「待つてよ、手ぶらで城へもどる気、博士！ 危険といつても一百五十年前の、危険な物なんでしょう？」

調査隊の打ち切りを必死で思い止まらせようと、シャーディはセリート博士に食い下がる。

「そうです」

「だつたら、慎重にすれば大丈夫でしょ？」

「ですが、この魔方陣の大きさからして……かなり大きな物を封印したと推定できますから、まずは、何を封印してあるか魔方陣の解析が先です」

「じや、博士読んで」

「直ぐには無理です。この文字は、初めて見る文字ですよ……これは、今すぐに私達の手に負える物ではございませんよ、姫」

無邪気に頼むシャーディ姫の気持ちが分からぬわけではない。

しかし、物は封印石。

何が眠っているにせよ、扱いを間違えればとんでもないことになる。

先人の知恵の英知を知りたくないわけではない。

だが、先人達が封印した物を発掘して利用する考古学において、準備もなしにすることなど出来ない相談というのだ。

ましてや、ここは二百五十年間、禁止地区だった場所なのだから、慎重にならざるをえない。

「城に戻るの……？」

「はい、準備も無しに不用意な調査は出来ません、戻りますよ」

セリート博士は、学術調査団のリーダーとして厳しくシャーディ姫に言い渡す。

「博士、記録はとりました。みんな撤収できます」

無情にもラクラン助手の報告が、撤収の合図となつた。

「嫌よ！ 折角見つけたのよ、成果も無しに城に帰るなんて絶対に嫌つ！ こんなの、つまんない、つまんな———いつ！」

「駄目です！」

再度、厳しく叱責する。

「だつて、だつて、つまんない、つまんな———いつ！」

そうそうに收まりそうもないシャーデイ姫の駄々こねに、バートとセディが顔を見合せた。

溜息まじりに姫の横に立つと、やおら、姫の腕を捕まえる。

「姫様！」

「嫌つ！ 放してつ、放してつたら！ もう、わかつた、わかつたから手を離してよ！」

あたりを見回すと、セリート博士もラクラン助手も含めて、学芸員達は引き上げを始めていた。

バートとセディに引きずられるように歩きだしたシャーデイは、後ろ髪を引かれる思いで振り返った。

この黒い封印石と、底に眠る物は絶対に凄い発見のはずなのだ。

しぶしぶ王都への帰還を了承したものの、シャーディはここで何かを残さないと、もう自分はここには永遠に来られない気がした。

「あつ、忘れ物！」

そう言うなりシャーディは、バートとセディの掴んでいる手を振り解くと真っ直ぐに封印石へ駆け戻った。

「そう、私がこれを見つけた証を付けなくちゃ……私が見つけたんだもの！」

腰に付けていた短剣を引き抜くと、自分のサインを刻むために短剣の刃先を、黒く光る滑らかな岩面にすべらせる。

「姫様、お戻り下さいっ！」

「ちよっと、サインしてただけなんだからー、戻るわよう！」

サインを書き終え戻ろうとした瞬間、石碑がドクンと脈打ったような気がした。  
「えつ……」

光りが……漆黒の巨石の中央から光りが全体に広がると、一瞬、目も眩むほど  
の強い輝きになつて地下空間を照らし出す。

巨大な石を包みこむように描かれていた魔方陣は、地下空間の天井までびつちりと埋め尽くされている様が、一瞬だけ浮かび上がり見てとることが出来た。その見たこともない文字や記号が、光りながら砂粒のようにバラバラと魔方陣の網から剥がれ落ち消えていく。

「な……なにつ?!」

「姫様ーっ！」

驚いたあまり、短剣が手からこぼれ落ちる。

慌てて拾おうとしやがみ込んだシャーデイの目前で、巨大な漆黒の石は震えながら妖しく光り輝き始めたのだ。

護衛兵士たちが、叫びながら駆け寄つてくるのを肌で感じる。

嫌な予感が脊髄を駆け上がる感覚に、シャーデイは直ぐさま立ち上がりその場から離れようとした。

「うわ？！ 今度は地震かつ？！」

しかし、その暇もなく地面から突き上げられるような激しい振動が彼らを襲う。バラバラと天井から、埃と小さな石が落ちてくる。

「み、みろ！ 石碑が、ああああッ！」

「う、うわわあああ？！ な、なんだ、あれは？！ なんなんだあ？！」

「せ、石碑が……？！」

「ま、魔導封印の文字が……消えている……つ！ 封印が……解けたのかつ？！」

騒音の中、なぜか博士の震える声が静かに響いて聞こえた。

「ひ、光が消えたつ……？！」

兵士の言葉の通り光輝いていた封印石の光が消え、一瞬の静寂が空間を支配す

る。

次の瞬間、石碑に亀裂が次々と走り、その中から深い暗黒の闇が奔流のようにあふれ出した。

世界が……暗黒の闇に覆われる。

「この邪悪な気配……ま、まさか……あ、あれに、封印されているのは……  
……わ、我々は解放してしまったのか……ま——」

博士の言葉を遮る轟音と共に、封印石は真っ二つに割れ粉々に砕け散った。

次の瞬間、封印石のあつた場所に一人の男が立っていた。

「クハハハハハハアーッ！　このときを……待っていたぞおおおお……ッ！」

暗黒の闇のなかから、傲慢なまでに冷徹で残酷な男の笑い声が響き渡る。

「んんく？　貴様らが俺様の封印を解いたのか？　ククク……愚かな人間どもよ、ご苦労だったな。では、これが礼だ。受け取るがいい！」

男の手からは無数の光の円盤が飛び出し、護衛兵や学芸員たちに襲いかかつた。

「ぐああああ！」

「アツ――――――！」

光る円盤は、触れたもの全てを切り裂いていく。

腕を切断された者、胴体から上を失った者、首が跳ね飛び転がっていく。

そこは阿鼻叫喚の地獄と化していた。

「は、博士！　博士――つ！」

「ぎやああああ――つ！」

セリート博士にしがみついていたラクラン助手は、博士の顔を見て悲鳴をあげ

てのけ反った。頭の右側から頭蓋骨と、脳みそが切断されて無い。立ち尽くしたまま死んでいる。

最初の攻撃で即死していたのだ。

ラクラン助手は博士を放り出すと、四つん這いになつて必死で出口へと向かう。「えつ……」

なぜか突然、地面に顔を擦りつけている……首が胴から離れ、視神経が最後に見せた映像は、地面にぶつかる瞬間だった。

「あ……あああ……」

一瞬にして物言わぬ肉塊が転がる惨状に恐怖して、シャーデイは動くことも口を開くことも出来ない。

「姫様っ！ お逃げ下さいっ！」

バートが、シャーデイの楯になるように前に立つ。

「ここを……は……ガツ……！」

その瞬間、バートの身体が縦に裂かれた。

血飛沫が、シャーデイの顔面に振りかかる。

「きやあああ———っ！」

それぞれ片足になつたその身体は、折り重なるように倒れていつた。シャーデイは、あまりの恐怖にその場にへたり込む。

それでも何とか逃げようとしたのだ。

後ろについた手で、尻を引きずるように後退しようとして、その手が触れた物は、もう一人の護衛兵士セディの頸から裂かれた頭。

「ひつ、ひいいい———っ！」

さつきまで生きていた。

小さいときから私を守つてくれていて、話し相手にもなつてくれていたのに、その目は見開いたまま驚いている様だつた。

「ああ……ああ……ああ……あ……」

シャーデイはおびただしい量の血の海に、一人座り込んでいる。むせ返るような血臭のなか、いつしか、その海には肉でできた島が乱立する。

もう、原型が何だったのかわからないほどに、それらは異様な形を成していた。

「んん？ まだ死んでない奴がいるだと？ 俺様の華麗な一閃で、全て消し飛ぶはずだが？」

「ああ……ああ……あ……あ……」

低い男の声が響き、暗黒の闇から湧き出るようになシャーデイの目の前に仮面をつけた長身の男が現れた。

声にならない声をもらし、シャーデイは見上げる。

その男の放つ異様な威圧感と冷徹さに、シャーデイの本能が瞬時に答えを出した。

コレハヒトデハナイ———人ならざる者。

「あ……羽根と……角が……」

よく見ると、彼の頭と背中には人には有りえないものが存在している。

雄牛の様な角、黒いコウモリのような羽根があった。

「おい、カニスこれはどういう……つとそうか、あいつらは、まだ封印中か……それ！」

男の右手が上空に振りかざされると、その指先から虚空へ魔方陣が展開され、目映いばかりの光が周囲に降り注ぐ。

散らばつた幾条もの光は絡まり、やがて三つの人影を作つた。

「やれやれ……やつと外の世界でしようか。もう私、体がなまつてなまつて……」「あははははははははっ！ やつと、出られたぞ！ うおおおおおおおおおお！」  
これで暴れられるぜえええっ！」

シャーデイは、その光景をただ呆然と見ていた。

「ん?  
イクラスは、どうなつてゐる?」

「ん？ こいつ充電切れ、充電しねーと動かねー」

「なら、さつきと充電を始めろ！」

一  
あ  
い  
あ  
い

「さて、カニス。なぜか、この人間だけ殺せなかつたのだが、理由がわかるか?」

男はシャーディを差して言つた。

「ふむ……、おそらく彼女が、魔王様の封印を解いたからでしょうね」

男の問いに鎧姿の人物が答える。

「……忌々しい封印の名残のようですね。魔王様、我々は、この女を殺すことができませぬ……」

「なんと！」

「……封印を解いた結果、この女自身が封印を解く鍵になつたと考えられます。つまり……」

「つまり……？」

「この人間が他の誰かに殺されれば、魔王様、我々は、また封印されてしまうと言ふことです」

「なるほどな……ちつ、忌々しい話だ！」

魔王……その言葉だけがシャーディの耳に残る。

私……魔王を甦らせちやつたんだ……ほんと……バカよね……失敗しちやつた……バート、セディ、ごめんなさい……無理にお願いしたセリート博士も、婚約

したてのラクランも……みんなごめんなさい……私もここで死ぬのね……お父様お母様、イナルナお姉様……ごめんなさい……。

「おい」

悲嘆に暮れるシャーディの思いを打ち破るように、金髪の女に腕を掴まれて強引に立たされてしまう。

フラフラとよろめくシャーディの腰を、魔王が抱き抱える。

「だが、ツキはまだ俺様に向いているぞ！」

「と、いいますと？」

鎧姿のカニスが、訝しげに首を少し傾けた。

「クク、したしたこと！ この人間は牝、しかも美味そうじやないか」

「早速、やるッスか?!」

金髪の女が、乱暴な言葉使いで嬉しそうに言う。

「コイツが俺様の性奴隸になれば全て解決よ！ ツキは、まだまだ俺様に向いていると言う訳だ！」

「うお！ 早速、十八番技が出た！」

「クハハハハハハハハハツ！ 最強の魔王、ベイルーツ様の復活だ！ その祝いに、今宵、貴様をいただくとしよう！」

シヤーデイの痺れた頭に魔王の言葉が窓

シャーデイの痺れた頭に魔王の言葉が突き刺さる……私が魔王の性奴隸に……

その叫びは、魔王復活の歓喜の叫びとして受け取られた。

ここから先の続きは予約特典でお読み下さい。

（特典予約は四月二十五日まで）

# プリンセスハンティング

五月二十八日発売

税込み 八千六百十円